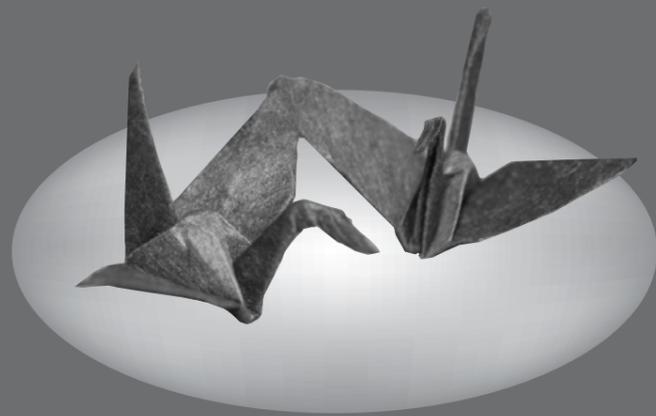
特集　終戦の日

8月15日は終戦記念日です。終戦から65年がたった今なお、戦争による被害と戦っている方々がいます。

私たちは両親や祖父母が経験した悲惨な過去を繰り返してはなりません。

今月号では、岩井啓之さんにお話しいただいた広島原爆の様子と、戦犯で不当な判決を受け処刑された柳本静一中尉についてお伝えします。

広島原爆現場の惨状

岩井　啓之さん談

社会人になるまで

私は、高知市桜井町の岩井家10人兄弟の3番目に生まれました。物心付いた時には戦時体制で、中国での戦争は拡大の一途、隣近所の日清・日露戦争に参加した老人の話を聞くのは最大の刺激であるもので、『戦争ごっこ』が遊びの中心でした。「大きくなったら何になる」と聞かれると、「陸軍大将になります」と答えていました。学校教育からか、天皇家を神格化し、国や郷土のため兵隊になるのは当然、男子の義務でした。

昭和15年3月、桜井町で高等小学校を卒業。15歳でした。

藤永田造船所

学校を卒業すると、大阪の藤永田造船所に入所しました。約1万人が海軍監督官の管理監督を受けて、主として駆逐艦を造っていました。入所から3年間は、午前中は会社の学校で勉強し、午後からは現場作業の手伝いの生活で、まだ余裕もあり、楽しいものでもありました。

伯父が退役の大佐で、新任艦長に完成した駆逐艦の引渡しの技術指導をしていた関係もあり、昭和16年4月、「浦風」「谷風」の試運転に同乗し、37ノット（約68㎞）以上の全速での極限の体験（艦の限度試験）もありました。

昭和18年になると、工員の多くは兵隊に行ったため、私は造船所の中心となって、食糧事情や戦局が悪化する中、毎日出勤、作業密度も濃くなり徹夜作業が連続し、「これでは、兵隊に行った方がいいなあ」と思うような状況となりました。

陸軍船舶工兵

昭和18年12月、徴兵年齢19歳への引き下げで、昭和19年に、広島宇品『暁部隊』に入隊し、上陸作戦の支援をする兵隊になりました。

昭和20年8月7日夜、山口県上関で非常呼集があり、大型上陸用舟艇に当座の食糧等を積んで出港しました。「沖縄へ逆上陸」などと、兵隊はウワサをしていましたが、どこへ航行していたのかは知らされていませんでした。そのうち「広島は新型爆弾で全滅状態」と聞き、船は宇品に到着しました。

広島救援での体験

宇品の船舶司令部は、ガラスが吹き飛び包帯姿の人たちが走っていました。ここで受けた命令は、『相生橋付近の浮遊遺体の収容と、被災患者の似島への移送』でした。当時の惨状は、皆さんが写真等でご承知のとおりです。ただ、私の場合は実情を見て、焦土を踏んで、炎天下で遺体の腐敗が早かったのか、腐臭と、「兵隊さん…、水を…水、助けてください」との被災者の声を生で聞き、消えない記憶となっています。

被災者で、「男女の区別ができない遺体」とは、どういうものを言うのでしょうか。髪は焼けて黒頭、衣服も焼けて丸裸、外性器も焼け落ちているようです。これが中心部に重なり横たわっていました。その時間は満潮で、火傷と火災から川に逃れた者は、引き潮に乗って太田川の河口や沖に流され、今も遺体があるかも知れないと言われています。

強く記憶されているのは9歳くらいの男の子の顔がススけて赤身が見え、手足は皮膚が無く2倍ほどに膨れ、「痛いよう、痛いよう、助けて」と言う口に、タオルを湿して当ててやったことです。陸軍病院の老婦人は、私の足に両手ですがり「私は、これからどうなりますか。助けてください」と言いました。致し方ない状況とは思いましたが、油を塗って包帯をするのが治療のようでした。悲しいかなこの体験は、忘れるものではなく、今も鮮明に当時の情景を思い起こすことができるのです。

被爆者となる

被爆地で、救助活動を行ったため、私は被爆者となりました。私の被爆は、直接に被爆したものではありませんので、2次被爆と言われる区分ですが、その後2年ほどは頭髪の抜けるものが多く、献血運動が始まった頃に、この検査で赤血球と白血球が異常に少ないことを知りました。

私の上司だった小隊長も班長もガンで死去し、平成5年頃からの胃ガン検診で、精密検査を要するようになり、不安な思いが消えることはありません。

不安の人生

戦後、「ピカドンの被害者は、10年も生きられない」とか、「うつる」とも言われ、根拠の無い差別を受けました。仕事の傍ら、県下被爆者の組織化に努めましたが、広島に動員されていた女子挺身隊の家族には、「嫁入りに障る」「隣近所に知れる」と言われ、「私は該当者ではない」とか、今でも被爆者手帳の交付を受けない方もあり、苦闘のボランティア活動でした。被爆者は後の人生に重荷を背負ったのでした。

現在、胎内被爆された方は、64～65歳、放射能による細胞損傷があり、見た目には判別できませんが、健康を気にしながら初老期を迎えています。我々被爆者には、**まだ戦後は終っていないのです**。

今は、気構えに体力が伴わない老境となりましたが、**香美市にも被爆体験者がいること**と、戦争の時代とはいえ、直接に原爆を語り伝える術を失った13万余の人の声を代弁し、戦後の戦争に無縁だった65年間の貴重さを、理解してもらえる活動の使命を帯びて生かされたと考えています。原爆現場の惨状を語る生き証人として。

当時の様子を語る岩井さん

消えない記憶

プロフィール

岩井（いわい）　啓之（ひろし）さん（84歳）

土佐山田町西本町

日本原水爆被害者団体協議会全国代表理事

高知県原爆被爆者の会会長

高知県香美市原爆被爆者の会支部長

香美市内の被爆者健康手帳所持者…12人

（平成22年7月現在）

黙とうをささげましょう

広島市原爆投下時刻
8月6日午前8時15分

長崎市原爆投下時刻
8月9日午前11時2分

終戦記念日
8月15日正午